7 平成7年（1995年） 7月10日 教皇様の声 （昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
JULY,1995 毎月10日発行 第183号

教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1995

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

日々の仕事を通じて 神は語られる

（世界学生会議の参加者たちへのお話）

（…）「仕事によって未来を開く。」 今回の会議のテーマは、人間生活の中心部分に関わっています。人間を特徴づける活動、という広義の意味で理解するならば、仕事とは人間によるあらゆる活動（回勅『働くことについて』序文参照）を指しています。それは人間を解明する鍵と言えるでしょう。このように、キリスト教では仕事こそ人間の真のアイデンティティを最も実感しやすい形で示すものであると考えています。生活を福音の理想に近づける過程で、キリスト信者は重大な問いに直面します。私の仕事には本当にキリストの霊がましますだろうか？過越の秘義が仕事の内に宿っているだろうか？

このように考えていくと、仕事の倫理についての興味深い考察を導きだすことができます。特に主体的な意味で、言い換えれば仕事の価値の第一の基礎は働く主体である人間自身にあるという事実、従って仕事のためのあらゆる努力は「ひとりの人格である、という天命を満たすために役立たせられなくてはならない」（前掲書6番）のです。

仕事は「ひとりの人格であるという天命」を実現することを目指していますから、聖性のための戦いに役立ちます。私たちが聖とされるのは、仕事によってではなく、内で働く恩寵の力によるのですが、聖化は一生を通じて続くものであり、従って私たちは日々の労苦という特定の限界の中で恩寵に応えています。仕事は私たちが神のこまやかな愛に応えるための場、環境、手段、あるいは道具と言葉を提供してくれると言えるでしょう。仕事がかき立てる前向きな関心、一人ひとりの心に呼び覚す動機、種々さまざまなモーティベーション、つきまとう困難や労苦、同時にしばしば伴う単調さ…働くことは、これらをも含めてさらに深い意味を帯びてきます。働くことは、人間の尊厳を表わすのみならず人間の人格を完成させる要素、人々を結ぶ絆、家族を養う収入の源、社会の進歩発展に寄与する道でもあります。しかし何よりもまず第一に、仕事とは神が人間を信頼してお任せになった課題であり、創造主に対する被造物の愛の試金石なのです。

> 仕事は聖性を求める戦いに役立ちます。私たちが神の愛に応えるための手段と言葉を与えてくれるからです。何よりも仕事とは、神が人間を信頼してお任せになる課題であり、神への愛の試金石でもあります。

こうした見地に立って、私は皆さんが実り多い勉学の日々の中で正しい「職業的熱意」をつちかい、聖性への切なる願いでその熱意を満たしてくださるよう望みます。神は仕事を通して語りかけ、日々の仕事は皆さんからの返答に他なりません。そう、福者ホセマリア・エスクリバーが説くように、仕事は祈りとならなければなりません。仕事は助けを求める嘆願、心からの主への委託の行為、犠牲をもいとわぬ態度、辛いことも多いが、常に豊かな恵みであり、徳を育てる肥沃な土壌と考えるべきです。（…）

ここでもう一度、未来を築くために仕事がいかに重要であるかを考えていただきたいと思います。仕事は正義にかない、それ自体に意味を認められるような、人間に対する見方と歩調を合わせていなければなりません。ここローマでの皆さんの仕事と祈りが、キリスト信者としての家庭生活、教区や小教区内での活動で実を結びますように。皆さんに特別の祝福を送りましょう。（…）

若い皆さん、常にキリストの精神をもって仕事を果たしてください。そうすれば贖いのわざに加わることができます。皆さんの仕事が本当にキリストの精神と合致しているかどうかを確かめてくれるのは、仕事を通して兄弟姉妹に仕えるという、特にキリスト教的と言える行いそのものです。同僚たちと手を取り合って働くことによって強められた友情と協力の絆は、祈りと償い、言葉と行いを通じて福音宣教の機会に変わります。贖いのわざは、カルワリオでのイエズスによってきわめられたことを忘れないでください。自分自身に問いかけてみましょう。私の仕事には十字架が反映しているだろうか？ 仕事や活動から生じる全ての試練や疲労の中で、ご自分の十字架を差し出されるキリストにほほえみを返すことができるだろうか？

親愛なる皆さん、私は皆さんの理想と計画を、復活の最初の証人であるマリア、十字架の下で沈黙のうちに苦しんだマリアに委ねます。使徒の祝福を送ります。

（九五・四・十一）

自由の名のもとに不道徳を許すことはできない

（映画の誕生百周年を記念して）

（…）実に、教会がイエス・キリストによる救いという良い知らせを告げるために登場した時から、人間の英知が生み出した驚くべきマス・コミュニケーションの手段の数々は、教会の強い関心を引いてきました。それらは人々の心にたいへん大きな影響を及ぼし、精神や文化の向上という面で非常に効果的な手段となり得る、またなるべきものです。（Inter mirifica, 1番参照）

映画が登場してちょうど百年になります。映画は「文化と価値の伝え手」であると言われます。（…）一八九五年十二月、パリでルミエール兄弟による初の「活動写真」が公開されて以来、映像産業は全世界に広がるメディアとなり、人々の心や行動に深い影響を及ぼしており、どんな社会でも、どんな政治体制の所でも、世論や文化を動かす上でめざましい力を持っています。映像芸術に対する教会の評価は、他の真正な芸術に対するのと同じく、全体として肯定的で、希望に満ちたものです。

映像芸術の名作が、人間精神への感動的な挑戦となりうること、倫理や霊性の面から見ても、たいへん重要で意味のある主題を深くきわめ得ることは周知の通りです。しかし不幸にも、映画作品の中には批判や反論、それもかなり厳しい批判に価するものがあります。映画が真実を歪め、本当の自由を圧迫し、人間の尊厳を傷つけるようなセックスや暴力シーンを見せる場合がそれです。映像表現の自由という名のもとに、こうしたことを行うのは間違いです。

自由は人間にとって不可欠のものですが、道徳上悪であることを正当化したり、下劣な行いを無罪放免するために用いてはなりません。多くの人が無批判に映画の強力で圧倒的な影響を受けてしまうことを考えれば、なおさらです。人の心を強め、高めるような映画を評価・奨励し、逆に人間をおとしめるようなことを描いたり容認したりするような映画なら、見たり制作したりするべきではないと説くことで、教会は創造性に制限のタガをはめるのではなく、創造力という才能を解放し、映像芸術が最高の理想を追求するよう励ましているのです。

真の芸術とは、真・善・美を語るものです。その目的は、鑑賞する人々の全面的な福利と発展のために役立つことでなければなりません。第二バチカン公会議の教父たちが、会議のしめくくりに芸術家に向けて述べた言葉を思い出します。「私たちの住むこの世界は、絶望におちいているため美を求めているのではない。必要なのは、真理と同じく人々の心に喜びをもたらす美、時の流れを越えた貴重な実りとしての美、時代を越えて賛美のうちに物事を共有させる美である。」映画の誕生百年を迎え、世界の映像産業が自らの可能性に思いを潜め、責任を自覚することを願ってやみません。

（…）（九五・三・十七、教皇庁広報評議会総会でのお話）

家庭内での仕事の値打ち

（女性年に当たって）

聖ヨセフの祝日に当り、思いは仕事の世界へと向かいます。今年は特に、勤労者と呼ばれる人々と会う機会がありました。ナザレトの家、ヨセフとマリアが助け合いながら家庭を切り盛りし、少年イエズスを育てた家を思い起こさずにはいられません。ヨセフは大工であり、言葉の真の意味で勤労者そのものでした。家事をこなしていたマリアは、今で言うなら主婦であり、家庭を運営する真の「ホームメーカー」たる全ての女性の模範です。

イデオロギーがらみの混乱や圧迫のあった時期を過ぎて、今では多くの人が女性と家庭と仕事との関係をより平静かつ客観的に模索するようになり、家庭における女性の存在が見直されてきました。回勅『働くことについて』に書いたように、「母親の役割と、それに伴う労苦と、子供たちが世話され、大切にされ、愛情をかけられる必要とについての社会的再評価がなければなりません。」（19番）

この点について、ナザレトの聖家族は意味深い手本となっています。ヨセフのかたわらで、マリアは個人的な、女性としてのやり方で働いていたことが福音書の記述からうかがえます。

一家の和合が夫の職業と大いに関わっていたことは間違いありません。ヨセフは家族のそば近くで仕事をし、少年イエズスに大工としての自らの熟練のわざを手ほどきすることができました。

今、私たちはマリアに祈り、全ての家庭、特に仕事がらみの問題で危機におちいっている家庭の希望と不安を聖母に委ねたいと思います。

ヨセフの配偶者マリアよ。御身の心には聖家族の喜びと苦しみがつまっています。苦悩の時をも神に捧げ、つねにその御摂理に信頼しておられました。日々労苦をいとわず、生き生きとした調和のうちに家族が過ごせるよう心を砕く、全ての女性たちをお守りください。彼らがキリスト教的英知に満ち、祈りと人間的な優しさに長じ、希望にも不幸にも強く、御身のように真の平和をもたらす者となれますように。アーメン。

（九五・三・十九）

「子供と秘跡」……ライト枢機卿他 著・井上博嗣、平井英子 訳　定価七七三円
「子供の性教育」…E・A・ホルダン著　中島紀子 訳　定価八〇〇円

★子供との関係において、洗礼・聖体・赦しの秘跡について考察する「子供と秘跡」、信仰や超自然的な意味を中心に性教育を考える「子供の性教育」……お申し込み・お問い合わせは精道教育促進協会まで。

政治と司祭

教会シリーズ 26

★司祭には政治に関わる使命はない★

1

司祭は地上のものから離脱していなければなりませんが、同じことは政治的なことがらと司祭との関係についても言えましょう。今日では、以前にも増して国家レベルでの広範囲にわたる諸問題のみならず個人と家庭生活という限られた分野においても、経済と政治両者間の絶え間ない相互作用を目にしています。このことは、議会の代表者や公職につく人を選出する時、市民に示されたリストの中の候補者を支援する時、政党を選ぶ時、そして公務の処理を巡っての、個人や政策、予算案についてのコメントに現われてきます。政治がもっぱら、あるいは主に経済的な事柄にのみ依存するのは間違いです。しかし、人間人格と共通善に奉仕するための高度な企画と言えども経済の影響を受けるので、地上のものの所有、使用、配置、分配に関する問題が必ず考慮されなければならないのです。

2

これら全てのことは司祭にも関わりのある倫理的な面を持っています。司祭はキリストから受けた使命に従って人間と社会に奉仕しているからです。キリストは教えを伝え、個人の生活のみならず社会生活にも光を与える掟を示しました。イエズスは特に、互いに愛し合うという掟を定めました。それは一人ひとりの人間とその権利の尊重を意味します。また、何が各人の義務であるかを認識し、個人、家族、団体の間で地上のものを仲良く分かち合うことを目的とした社会正義の規定をも意味しているのです。さらにイエズスは、愛とは人類を構成する国籍や人種の違いを越えた普遍的なものであることを強調しました。イエズスは自らを「人の子」と称し、まさに救い主であると示すことで、そのわざが階級、言葉、文化、また民族や社会集団の差別なく、全ての人に向けられたものであることを表わされたのです。イエズスは使徒たちと全ての人に平和を宣べ伝え、普遍的レベルでの隣人愛、連帯、助け合いという教えの基礎を築いたのです。これこそ今も昔も良い政治の目的であり、大原則であることは明らかです。

霊的解放をもたらすために

とは言えイエズスは決して政治活動に関わろうとはせず、自分を地上の事柄や問題に引きずり込もうとする企てを全て避けられました。（ヨハネ6・15）イエズスの築くべき王国はこの世のものではありません。（同18・36）そこでイエズスは、公権に対する自分の態度を明らかにするよう求める人々に、「チェザルのものはチェザルに、神のものは神に返せ」と答えられました。（マテオ22・21）イエズスは自らが属する愛するユダヤの民に、彼らが救い主に期待したような政治的解放は決して約束されませんでした。イエズスが神の子として来られたのは、罪の奴隷となった人類を霊的に解放し、神の国に導くためであると言われました。（ヨハネ8・34～36）すなわち「仕えられるためではなく仕えるために来た」（マテオ20・28）のであり、イエズスに従う人々、特に十二使徒たちにも、この世の君主や勢力者のように君臨したり権力をふるうことを考えてはならず、彼らの「主または先生」（ヨハネ13・13～14）のように全ての人に仕える謙遜なしもべでなければならない（マテオ20・20～28）と言われました。

イエズスのもたらしたこの霊的解放は、個人生活・社会生活全般にわたって決定的な影響を及ぼしました。人間を人格の主体とみなし、個人の間の関係は正義にのっとって考える、新たな認識の時代を開いたのです。しかし人の子の直接の関心は、この方向ではなかったのです。

3

この貧しく自由な状態が司祭に最もふさわしい境遇であることはおわかりいただけるでしょう。司祭はキリストの代弁者であり、人類の贖いを宣べ伝え、その賜をあらゆる所、あらゆる生活レベルの人々にもたらす役務を負う者だからです。一九七一年のシノドスは、「司祭たちが全教会とともに全力を尽くして具体的に行動することを考え、その手段を選ばなくてはならない時がある。それは基本的人権を守ること、人々の生活全体の向上をはかること、そして平和と正義を実現することが問題となっている時であって、いつも福音にふさわしい方法と手段を選ばねばならない。こうした全ては、個人が問題である場合だけでなく、社会が問題である場合にも当てはまる。だから司祭たちは信徒を助け、彼らが正しい判断と行動の基準を持とうと努めるようにしてほしい」と述べています。(Enchiridion Vaticanum, IV, 1194)

司祭は政治活動を避けるべき

このシノドス文書は、司祭が全教会員と力を合わせて正義と平和に奉仕すべきであると記し、社会的・政治的な活動における司祭の役割は信徒のそれと同じではないことを教えています。それはカトリック教会のカテキズムに、より明確に記されています。「政治行動や社会組織に直接関わることは教会の司牧者の任ではない。この職務は一般信徒にこそふさわしい召命である。信徒は仲間の市民と共に自らの裁量でこれに携わる。」（2442番）

信徒はこうした活動に直接携わり、福音の教えが社会でより大きな影響力を持つために尽力するよう招かれています。司祭はキリストに従い、より直接的に神の王国の発展に関わるのです。イエズスのように、司祭は政治活動への参与を放棄しなければなりません。特に兄弟として、また時には霊的な父として、全ての人のための人であるには、（ほぼ必然的な結果として）中立であるべきです。

不変の教え

個人であれ団体であれ、状況によっては正義や平和を守るために公的機関による助けや補助が望ましい、あるいは必要であるにもかかわらず、そのような機関がなかったり、混乱している場合も例外的にはあり得ます。過去には教会自身が、多くの利点もあったが、同時にそれに伴う全ての困難と重荷をも負いつつ、この任を果たしてきました。幸い、最近の政治的、構造的、理論的な発展は別の方向に向かっています。市民社会には、自らの課題を自主的に果たすための機関と手段が備わりつつあります。（現代世界憲章、40番、76番参照）

このように教会には教会自身の役務があります。すなわち福音を宣べ伝えること、政治的な役割を引き受けたり求めたりせず、固有のやり方で共通善に協力するに止めることです。

4

こうして見ると、政治の分野における司祭の行動に関する一九七一年のシノドスの決定がより理解できるでしょう。司祭は確かに、政治に関する個人的な意見を持つ権利も、良心に従って選挙権を行使する権利も持っています。シノドスが述べているように、「政治、社会、経済について、いろいろと違った立場を取ることが当然とされる状況のもとでは、司祭たちは全ての市民と同じように自分の立場を選ぶ権利を持つ。しかし、政治問題についての立場はもともと必然性を持ちえないものであり、決して福音から完全に、必然性をもって、また恒久的に導きだされることはない。だから、来るべき世のことがらの証人である司祭は、あらゆる政治上の役割、あるいは運動から、ある程度距離をおくようにしなければならない。」（前掲書IV,1195）特に、政党は福音の真理とは決して同一視され得ないということを司祭は心に留めておくべきでしょう。従ってそれは福音とは異なり、決して絶対的な忠誠の対象とはなり得ません。キリスト信者である市民が明らかに福音の光を受けて正しい理解のもとに政党を立派に構成している場合でも、司祭はこの相対性を考慮に入れておくべきでしょう。司祭は他の政党や社会団体の上にもキリストの光を注ぐよう努力しなければなりません。

信徒の良心の育成のために

司祭が自分自身の個人的な選択を表明する権利は、司祭の役務から生じる要請によって制限されるということをつけ加えなければなりません。この制限は、司祭がキリストの模範に倣うよう招かれている貧しさの一面でもあると言えるのです。事実、時に司祭は、一致の強固なしるしとなって福音を完全に宣べ伝えるために自分自身の権利の行使を慎むこともあります。さらに、自分の選択を唯一正当なものとして提示することも避けなければなりません。キリスト教共同体の中で、信徒たちが大人であることを忘れず、信徒の能力を高く評価すべきです。（同、IV,1196参照）また、信徒の良心を形成することによって、その成熟を助けるよう努めなければなりません。（同、IV,1194）司祭は、政治的な立場を取ることによって敵を作らないようできるだけの努力をすべきです。政治に関わったために、不信を引き起こしたり、司牧を委ねられた信者たちを離散させることになりかねないのです。

キリストは決して政治活動に携わろうとはされませんでした。キリストの築くべき王国はこの世のものではなかったのです。キリストに従い、直接的に神の王国の発展に携わる司祭も、政治活動への参与を放棄しなければなりません。それは司祭に委ねられた司牧の役目上、当然のことでもあります。司祭には、政治活動を行うためのカリスマや使命は与えられていないのです。

5

一九七一年のシノドスは司祭は全ての政治的な活動を慎むべきであることを特に強調しています。「ある政治グループのリーダーとなること、あるいはそこで積極的な役割を果たすことは、どんな司祭にも許されない。ただし、特別の具体的な状況のもとに、共通の善が事実これを必要とし、司祭評議会と、問題によってはさらに司教協議会にはかった上で、司教が同意した場合は例外とする。」（同、IV,1197）このように、通常の範囲から逸脱することはありえますが、これは実に例外的な状況においてのみ正当化され得るもので、正式の許可を必要とします。

教会は司祭たちに警告します。福音の理想に惜しみなく仕えるあなた方は、政治を正し、不正や搾取、あらゆる種類の抑圧を除くため、政治に関わればより効果的な助けができると思うかもしれません。しかしそれは派閥闘争に巻き込まれやすく、あなた方の目指す正義にかなった世界をもたらすことにはならず、かえって貧しい人々を搾取する悪しき新手の方法となる恐れがあります。いずれにせよ司祭は、この政治的な関わりと政治行動のためには、どのような使命もカリスマも持ち得ないことを理解しなければなりません。

司祭の使命自体が社会に役立つ

ゆえに、自らの生きる社会の善のため、自身の司牧的使命において、司祭がより一層大きな信仰を持つよう私は祈り、また皆さんにも祈るよう願います。また現代におけるその重要性を司祭たちが認識するよう、そして七一年のシノドスの声明を理解することを望みます。「司祭たちの存在全体におよぶ独自の使命を第一とすることを、いつも心にとめなくてはならない。深い信頼をもち、神のことをつねに味わいかえしながら、これを人々に―彼らはこれを期待している―効果的に、また喜びをもって告げられるようになってほしい。」（同、IV,1198）

そうです。私は兄弟である司祭たちにこの霊的洞察力の賜が今日も明日も日ごと豊かに与えられるよう望み、祈ります。この恵みにより、司祭は政治的な次元においてもイエズスがお教えになった清貧のうちに生きることを理解し、従うことができるのです。（九三・七・二八）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料七百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
01130-
8-72393